



パテック フィリップ ジュネーブ

2021年4月

パテック フィリップは、デザインを一新し、新しいムーブメントを搭載した当社の最も重要なクラシック、カラトラバ《クルー・ド・パリ》6119R-001モデルと6119G-001モデルを発表する

パテック フィリップ・スタイルの最も伝説的なモデルのひとつである、ギヨシェ装飾による《クルー・ド・パリ》ベゼルを備えた著名なカラトラバが、きわめて現代的な外観、わずかに大きいケース径、および植字インデックスの文字盤を備えた新しいバージョンとなって登場する。このスリムで控え目なエレガンスに溢れた紳士用タイムピースは、65時間のパワーリザーブを備えた、まったく新しいパテック フィリップの手巻ムーブメントを搭載し、ローズゴールドまたはホワイトゴールド仕様から選択できる。

1932年に96モデル（モデル番号を与えられたパテック フィリップ最初のモデル）として初めて発表されたカラトラバは、クラシックなラウンド型腕時計の真髄としての地位を確立し、パテック フィリップによる時を超越したエレガンスの最も美しい象徴のひとつと見なされてきた。そのピュアなデザインは、《機能がフォルムを決定する》というバウハウス運動のミニマリズムの原則を反映している。以後フラット・ベゼル、わずかに丸みを帯びたベゼル、ポリッシュ仕上げ、ダイヤモンド付、ギヨシェ装飾を施したケースなど、婦人用、紳士用の多数のバージョンが生み出された。フォルムは超薄型、迫力あるサイズのモデル、オフィサータイプなど多岐にわたり、文字盤も時、分表示のみのものから秒表示、さらにより高度な機能を含むものも創作されてきた。その結果、カラトラバはマニュファクチュール パテック フィリップの最も包括的なコレクションのひとつとなるに至っている。

伝説的なタイムピースの系譜

この偉大な伝統の中で、一連のカラトラバ・モデルは、その印象がとりわけ強く、多大な注目を集めた。ベゼルにギヨシェ装飾による《クルー・ド・パリ》(ホブネイル・パターン)を施したモデルである。ダイヤモンド研磨により形成された微細なピラミッド型のモチーフは、1934年のカラトラバ96Dモデル（Dは装飾の意）のベゼルにすでに見ることができる。96Dモデルは96モデルと同じ手巻キャリバー 12-120、同じカーブしたラグ、同じ植字インデックスとスモールセコンドを配した文字盤を備えていた。1972年、このタイプのベゼルが、手巻キャリバー 177を搭載し、時、分表示、ローマ数字、直線ラグを備えた3520Dモデルにも採用された。1985年、時計製作の世界で最も著名なタイムピースのひとつとなるカラトラバ・モデルがデビューを飾った。手巻キャリバー 215 PSを搭載し、ブラック塗装ローマ数字と6時位置にスモールセコンドを配したホワイト文字盤、直線ラグを備えた伝説的な3919モデルである。このモデルは20年以上にわたって製作された。この時期には、クォーツ・ムーブメント搭載の4819モデル（1987年）、クォーツ・ムーブメントを搭載しダイヤモンド・ベゼルを備えた4820モデル（1988年）、さらに手巻キャリバー 16-250を搭載した4809モデル（1991年）など、女性向けのケース径の小さいバージョンも見られた。手巻キャリバー 215 PSを搭載した5115モデル（2000年）には、96Dモデルからインスピレーションを得たカーブしたラグが再び採用された。直線ラグを備え、自動巻キャリバー 240を搭載した5120モデルは2001年にデビューした。わずかに細長くなったローマ数字を配した5119モデル（2006



《報道資料》 ページ 2

年)は、3919モデルのリニューアル版といえよう。ケースは3919モデルの33.5 mmから36 mmへと大きくなっているが、手巻キャリバー 215 PSと直線ラグは変わらない。2009年には、本七宝文字盤を備えた5116モデルが加わった。

2016年、ギヨシェ装飾によるクルー・ド・パリをケース側面や、グランドマスター・チャイム6300モデル(パテック フィリップの最も複雑な腕時計)の2つの文字盤のひとつに採用したことは、マニュファクチュールパテック フィリップにとって、この伝説的な装飾がどれほど重要かをよく表している。しかし2018年以降、一部の希少なハンドクラフトの限定モデル(5177モデル)を除いて、《クルー・ド・パリ》モチーフは、パテック フィリップの現行コレクションに採用されていなかった。6119モデルは、その輝かしいカムバックの理想的な機会を提供したのである。

リニューアルされた象徴的デザイン

パテック フィリップは、象徴的なデザインをきわめて現代的な方法でリニューアルすることにより、カラトラバ《クルー・ド・パリ》に新鮮な活力を授けた。新しい6119モデル(モデル番号は伝説的な3919モデルと2006年の5119モデルへのオマージュである)は、わずかに大きくなった39 mmのケース径で際立っている。それは現代の好みを反映し、ケースのスリムなエレガンスを損なうことなく、手首における存在感を強調するものである。

今ひとつのデザイン上の進化は、白地にブラック塗装ローマ数字を配した3919および5119モデルに代わり、ファセット(切子面)仕上げの18金ゴールド植字《オビュ》(弾丸)型インデックス(12時位置はダブル・インデックス)が採用されたことである。新しいインデックスは、ひとまわり大きくなった文字盤の時を超越したピュアなデザインを強調している。96モデル(1932年)と96Dモデル(1934年)も同タイプの植字インデックスを備えていた。こうしてパテック フィリップは、カラトラバ・デザインのルーツへの回帰を果たしたといえよう。ゴールドのドフィース型時・分針も96モデルを彷彿させるが、2ファセットではなく3ファセットに進化しており、文字盤円周のシュマン・ド・フェール(レール)型分スケールと相まって優れた視認性を保証している。細い《シュヴー》(毛髪)型の秒針は、6時位置の4分割されたサブダイヤル上を回転する。

ギヨシェ装飾によるクルー・ド・パリ・ベゼルは幅がわずかに広くなり、傾斜がつけられ、ポリッシュ仕上げされた細いラインがボックス・タイプのサファイヤクリスタル・ガラスを縁取っている。

ラグの形状もリデザインされた。3919モデルの直線ラグに代わり、96モデルおよび1990年代の自動巻カラトラバ・モデルからインスピレーションを得たカーブしたラグが採用された。新しいラグは、ケースからバンドへのスムーズな移行を保証し、快適な装着感を実現している。

パテック フィリップ・スタイルにおけるこの新しいフラッグシップ・モデルは、マニュファクチュールの偉大なクラシックの最新傑作であり、2つのバージョンがある。6119R-001モデルは、ローズゴールド・ケースとグレイ仕上げのシルバー文字盤を組み合わせ、ローズゴールド植字インデックスと指針を備えている。ローズゴールドのピンバックル付ブリリアント・チョコレートブラウンのアリゲーター・バンドを装着している。ホワイトゴールド仕様の6119G-001モデルは、縦サテン仕上げの地に微細な同心円模様のサブダイヤルという、コント



《報道資料》 ページ 3

ラストを持たせたチャコールグレーの文字盤がデリケートな輝きを見せる。植字インデックスと指針は、ケースと同じホワイトゴールドである。ホワイトゴールドのピンバックル付ブリリアント・ブラック・アリゲーター・バンドを装着している。6119モデルの両方のバージョンに装着されたピンバックルの独特のフォルムは、パテック フィリップの社長であったアンリ・スターンによってアメリカ市場のためにデザインされたものである。

まったく新しい手巻ムーブメント

カラトラバ《クルー・ド・パリ》6119モデルは、このパテック フィリップの最も著名なタイムピース・ファミリーの歴史における、新たな時代を告げるものである。なぜならこの発表は、マニュファクチュール パテック フィリップが誇る既に広範な自社キャリバーのコレクションをさらに充実させる、まったく新しい基本キャリバーを導入する機会となったからである。その開発は、タイムレスなエレガンスを体現した、きわめてスリムなケースの創作を可能とする、キャリバー 215 PSよりも直径の大きな手巻ムーブメントの必要性に基づくものであった。新しいキャリバー 30-255 PSは、ケーシング径が30.4 mm（総径は31 mm）であるのに対し、キャリバー 215 PSはケーシング径が21.5 mm（総径は21.9 mm）である。厚さは、キャリバー名が指すように、キャリバー 215と同一の2.55 mmである。キャリバー 215と同一の厚さを維持するために、パテック フィリップ技術陣は、歯車を持たない2番カナが2番車と中間車を介して噛み合う構造や、角穴車と丸穴車を香箱受けの上ではなく下に配置するなど、いくつかの独創的な解決法を採用した。

エネルギーに関しても、キャリバー 30-255 PSは独自の解決法により、ほぼ3日間に相当する65時間のパワーリザーブを実現している。並列に配置された2個の香箱は、いずれも2番カナに噛み合っており、同時に動力を輪列に伝える。これはきわめて希な構造である。通常、2個の香箱は直列に配置され、その目的は長いパワーリザーブを得ることである。しかしこのムーブメントはぜんまいのトルク（回転モーメント）を増すことを目的としており、2個の香箱のトルクが合算される。この解決法により、限られた厚さにおいて最大の出力を生み出すことができたのである。その結果、テンプの慣性モーメントが倍増（パテック フィリップのテンプ振動数が4 Hzのムーブメント中、最も高い10 mg.cm²）し、歩度の安定性が向上し、精度調整も容易となった。テンプ振動数を4Hz（28,800片道振動/時）としたことも同じ目的からである。キャリバー 30-255 PSが、厳格なパテック フィリップ・シールの日差許容値（-3～+2秒/日）をクリアしていることはいうまでもない。

リュウズを時刻調整の位置に引き出した時、テンプをブロックするストップセコンド機能が搭載されており、1秒以内の精度で時刻を調整できる。時刻調整の後、リュウズを押し戻すとテンプにわずかな力が加えられ、ムーブメントは再び作動を開始する。

新しいムーブメントのアーキテクチャーは、《各歯車または機能は個別の受け（ブリッジ）を持たなければならない》という歴史的に受け継がれた原則に従って注意深く再検討された。その結果、サファイヤクリスタル・バックを通して、コート・ド・ジュネーブ、面取り、ポリッシュ仕上げなど、最も厳格な時計製作の伝統に準拠して仕上げられた6枚のエレガントな形状の受けを鑑賞することができる。カラトラバ《クルー・ド・パリ》6119モデルに搭載されてデビューを飾るキャリバー 30-255 PSには、美学とパフォーマンスが統合されている。この新しい手巻ムーブメントが、パテック フィリップのコレクションにおいて輝かしい未来を約束されていることは言を待たない。



技術仕様1

カラトラバ《クルー・ド・パリ》6119R-001モデル

ムーブメント：	キャリバー 30-255 PS 機械式手巻ムーブメント。スモールセコンド。
総 径：	31 mm
ケーシング径：	30.4 mm
厚 さ：	2.55 mm
部品総数：	164個
石 数：	27石
連続駆動可能時間：	最小65時間
振動数：	28,800 振動（片道）/時（4 Hz）
テンプ：	Gyromax®
髭ぜんまい：	Spiromax® (Silinvar®製)
髭持ち：	可動式
表 示：	指 針 ・時・分針（センター） ・スモールセコンド（6時位置）
セッティング機能：	リュウズの2位置 ・押し込んだ位置： 巻き上げ ・引き出した位置： 時刻合わせ（ストップセコンド）
刻 印：	パテック フィリップ・シール
外 装	
ケース：	18金ローズゴールド5N仕様 サファイヤクリスタル・バック 3気圧防水
ケース寸法：	直径：39 mm 長さ：46.9 mm（ラグを含む） 幅：41.35 mm（9～3時位置、リュウズを含む） 厚さ：8.43 mm（サファイヤクリスタル・ガラス～ラグ） 厚さ：8.08 mm（サファイヤクリスタル・ガラス～ケース・バック） ラグ間隔：21 mm



外 装

- ケース： 18金ホワイトゴールド仕様
サファイヤクリスタル・バック
3気圧防水
- ケース寸法： 直径：39 mm
長さ：46.9 mm (ラグを含む)
幅：41.35 mm (9～3時位置、リュウズを含む)
厚さ：8.43 mm (サファイヤクリスタル・ガラス～ラグ)
厚さ：8.08 mm (サファイヤクリスタル・ガラス～ケース・バック)
ラグ間隔：21 mm
- 文字盤：
 - ・真鍮、縦サテン仕上げチャコールグレーの地に微細な同心円模様のサブダイヤル (6時位置)
 - ・18金ホワイトゴールドのファセット仕上げ《オビュ》(弾丸) 型植字インデックス
 - ・18金ホワイトゴールドの3ファセット・ドフィーヌ型 時・分針
 - ・18金ホワイトゴールドの《シュヴー》型秒針
- バンド：
 - ・ラージ・スクエアの手縫い風アリゲーター・バンド、カラーはブリリアント・ブラック、18金ホワイトゴールドのピンバックル付

パテック フィリップ・カラトラバ96モデルおよび《クルー・ド・パリ》モデルの歴史における重要な日付

1932年

著名な96モデル (最初のカラトラバであり、モデル番号を与えられたパテック フィリップ最初のモデル) の発表。手巻キャリバー 12-120を搭載。この洗練されたデザインの時計は、クラシックなラウンド型腕時計の真髄としての地位を確立した。

1934年

96Dモデル (Dは装飾の意) は、96モデルと同じ手巻キャリバー 12-120、同じ文字盤、同じ植字インデックス、同じカーブしたラグを備えているが、ギヨシェ装飾による《クルー・ド・パリ》ベゼルで際立っている。

1953年

2526モデルは、自動巻キャリバー 12-600 ATを備えた最初のパテック フィリップ腕時計である。

1972年

手巻キャリバー 177を搭載した3520Dモデルは、《クルー・ド・パリ》ベゼル、時、分表示、ローマ数字を配した文字盤、直線ラグを備えたケースを組み合わせている。



《報道資料》 ページ 7

1982年

96モデルからインスピレーションを得たケースと文字盤を備えた3796モデルは、スモールセコンドを備えた自動巻キャリバー 215 PSを搭載している。

1985年

手巻キャリバー 215 PSを搭載し、ブラック塗装ローマ数字と6時位置にスモールセコンドを配したホワイト文字盤、直線ラグを備えた伝説的な《クルー・ド・パリ》3919モデルの発表。このモデルは20年間にわたって製作され、時計製作の世界で最も著名なタイムピースのひとつとなった。

1988年

《クルー・ド・パリ》ベゼルと直線ラグを備えた3992モデルは、自動巻超薄型キャリバー 240を搭載している。

2000年

自動巻キャリバー 315 S Cを搭載した5107モデルは、文字盤にセンターセコンドと日付表示を備えている。

2000年

手巻キャリバー 215 PSを搭載したクルー・ド・パリ5115モデルには、96と96Dモデルからインスピレーションを得たカーブしたラグが採用された。

2001年

時・分針、ローマ数字、直線ラグを備えたクルー・ド・パリ5120モデルは、自動巻キャリバー 240を搭載している。

2004年

5196モデルは、スモールセコンド付の手巻キャリバー 215 PS、および96モデルからインスピレーションを得たケースと文字盤を組み合わせている。

2006年

細長くなったローマ数字を配した5119モデルは3919モデルのリニューアル版といえる。ケースは3919モデルの33.5 mmから36 mmへと大きくなっているが、手巻キャリバー 215 PSと直線ラグは変わらない。

